

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	常深 新平
主 論 文 題 名：				
メルロ＝ポンティにおける芸術を介した人間形成論				
(内容の要旨)				
本論文の目的は、フランスの現象学者モーリス・メルロ＝ポンティ（Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961）のテキストを人間形成論として再構成することで、絵を見ることが人間の経験のしかたをいかに変容させるのか、その原理とはいかなるものなのか、を明らかにすることにある。 第1部では、メルロ＝ポンティのテキストを「芸術を介した人間形成論」として再構成していくために、彼のテキストがドイツの人間形成論の伝統の枠組みで読解されるものであることを正当化してきた。 【第1章】 第1章では、メルロ＝ポンティのテキストはドイツの人間形成論の伝統と親和性を持ち、現に現代ドイツで人間形成論の枠組みで逆輸入されるに至っていることが示された。こうしたことが起きたのは、ドイツの人間形成論の伝統が多くを負っているドイツ観念論における経験主体の変容のテーマを、メルロ＝ポンティは取り入れて理論形成をしていたからである、と予想された。つまり、彼はドイツ観念論の受容を介して間接的にドイツの人間形成論を受容していたことが予想されたのである。 【第2章】 第2章では、メルロ＝ポンティのドイツ観念論の受容を、彼のカント解釈から探った。そこでは、メルロ＝ポンティは、カント自身は展開することがなかったがシェリングやヘーゲルが注目した「知的直観」や「直観的悟性」という概念に注目して、身体を起点にして知らなかったものを知っていく人間の学習経験を語ろうとしていたことが明らかになった。 【第3章】 第3章では、メルロ＝ポンティが、ドイツ観念論の精華であるヘーゲルを彼独自のしかたで受容して、人間の経験変容のプロセスを語っていることを示した。メルロ＝ポンティによって改訂されたヘーゲル主義には、人間の経験と存在様態の変容をすなわち人間形成を可能にする、学問および表現観と人間観がある。メルロ＝ポンティによれば、				

ある学問や表現形式における認識の生成には、事後的に合理的な連鎖として判明する歴史的な構造をもつ。そして人間は、こうした構造を「～すべき」あるいは「～した方がよい」という促しとして身体レベルで知覚し、応答することができるのである。このようにメルロ＝ポンティは、ドイツ観念論（とくにヘーゲル）を受容して、人間に陶冶可能性を確保し人間形成のあり方を語っている点で、「人間形成論〔Bildungstheorie〕」の文脈に位置づけられるのである。

第2部では、メルロ＝ポンティのテクストを「芸術を介した人間形成論」として再構成していくために、芸術のなかでも絵画表現における芸術は、人間にどのような促しを与える構造をもっていると考えられているのかを探究してきた。

【第4章】

第4章では、メルロ＝ポンティが「感性的理念」という概念のもとで、絵画表現、文学、数学といった表現形式を、いずれも人間の歴史的・文化的意味を生じせしめる身体化された実践でありかつ知的な成果を創り出していくものとして、比較していることを確認した。

【第5章】

第5章では、絵画表現、文学、数学といったさまざまな表現形式は、こうした表現形式に基づいた知的な成果が創造される際にいずれも「感性的理念」に関わる点で単に比較可能であるだけではなく、それぞれのしかたで世界に在る真理を等しく体現するという意味で、等価性をもつとメルロ＝ポンティが考えていることを確認した。加えて、第6章以降検討する、メルロ＝ポンティの論考「間接的言語と沈黙の声」を読む枠組みを整えた。本章において、以下のような仮説が提示された。「間接的言語と沈黙の声」では、第一段階目として、その前半部で、言語表現および絵画表現一般がもつ制度的な構造はいかなるものか、が探究されている。次に、第二段階目として、その後半部では、その制度の産物（作品）のうち社会に受け入れられたものがどのようにして価値をもった芸術作品となっていくのか、が探究されている。

【第6章】

第6章では、「間接的言語と沈黙の声」の第一段階目に相当することを、すなわちメルロ＝ポンティが絵画表現一般のもつ制度的な構造を、いかに考えているのかを探究した。そのために、絵画表現における歴史的な展開のしかたと、それが人間に要求する規範性を、メルロ＝ポンティは「三重の取り上げ直し」という言葉で語ろうとしている、ということに注目した。そして、フッサール由来の *Stiftung* という概念を手がかりに、絵画表現も数学のいずれも生み出される身振り（知覚のしかた）に、メルロ＝ポンティは同じ構造をもっていると考えていることが明らかになった。ここでは、絵画表現にお

ける「三重の取り上げ直し」とは、ある絵画作品を描いたり鑑賞したりするときに、第一にある画家がもつ世界についての視覚経験や、その画家自身の過去の作品および他の画家の作品から窺える制作時の身振りをより強く発現させ、第二に絵画表現が紡いできた推し進め、第三にこのように絵画表現が紡ぎつつある歴史を反復・保存する、というような三つのことを同時に取り上げ直していくことだと考えられた。メルロ＝ポンティによれば、絵画表現も、幾何学における理論展開の内的構造（三重の *Stiftung*）に非常に類似した内的構造（三重の取り上げ直し）を伴った歴史的進展をしている、すなわち幾何学における理論展開と同じような内的必然をもった歴史的進展をしているのである。

【第7章】

第7章では、「間接的言語と沈黙の声」の第二段階目に相当することを、すなわちメルロ＝ポンティは、絵画表現という制度の産物（絵画作品）のうち、社会に受け入れられたものが価値をもった芸術作品となっていくしかたを探究していることを確かめてきた。彼は、第6章で明らかにしたように、絵画表現が固有にもつ規範性が存在している、と考えている。彼によれば、絵画表現が固有にもつ規範性は、後発の行為を「統辞法や論理学と同じ程度」に促す、感覚可能でありながらも分節化されたものなのである。では、絵画作品へ価値判断が下され芸術作品となっていくものが生じる際に、私たちは上記のような絵画表現が固有にもつ規範性といかに関わるのだろうか。これについて、メルロ＝ポンティは以下のように考えていると想定された。確かに、さまざまな表現形式と同じく、絵画表現も固有の規範性を持つ。だがそれにもかかわらず、絵画表現という表現形式は、それに基づく産物（絵画作品）が価値判断される際に、偶然的な社会の状況や、他の行為領域の規範性からの影響を被りやすい表現形式なのである。

【第8章】

第6章と第7章で、第5章で立てた、「間接的言語と沈黙の声」が二段階の構造をもっているという仮説を確かめてきた。第8章では、最後に、この仮説のもとで、現代の英米圏で議論されている、芸術を制度として定義する試みの文脈で読解した。そして、「間接的言語と沈黙の声」に潜む芸術に対する制度論的定義を抽出することを試みた。それによって、メルロ＝ポンティにおける絵画表現論に、以下二点の特徴が見出された。第一に、彼が考えるところの絵画表現の制度的なあり方は、数理と並置されるレベルでの非常に強い歴史的様相をもっている、ということである。第二に、彼が考えるところの絵画芸術の制度的なあり方は、多くの人に開かれたものでありながら、それに適切に関わるのには高度な学習を要求するものだ、ということである。

このように、メルロ＝ポンティは、絵画表現にはすでに人間に「～に応答すべきである」と要求する規範性が存在するのであり、人間はそれに応答する能力をもっている、

と主張している。彼によれば、こうした規範性とそれに対する人間の応答能力の発揮がうまくかみ合うことによって、人間も芸術制度も共に豊かに形成されていくのである。これが、メルロ＝ポンティにおける芸術を介した人間形成論の根幹をなしている。

第3部では、「メルロ＝ポンティにおける芸術を介した人間形成論」の実相に迫ることを試みた。第2部では、メルロ＝ポンティの芸術を介した人間形成論の枠組みを見出した。すなわち、彼によれば、絵画表現という制度がもつ規範性とそれに対する人間の応答能力の発揮がうまくかみ合うことによって、人間も絵画芸術という制度も豊かに形成されていくのである。このような、人が芸術家になっていく人間形成のあり方を、メルロ＝ポンティが具体的にどのように説明したのか／しうるのかを、第3部では探究してきたのである。

【第9章】

第9章では、メルロ＝ポンティの講義録から、芸術に従事する芸術家、とくに文学に従事する作家の人間形成プロセスをまとめた。彼によれば、芸術家を志している人間は、自分がどのように見られうるか・他人からどのように実際に見られているか、というナルシズム的な心的状態を発揮してこそ、自己の像と他人から見られた像との間の差異・隔たりを意識し、世界からの疎外を経験しうる。その後、ある表現形式を介して、自分の感情や表現形式自体について徹底的な自己内省がなされると、その人間は、突如としてその表現形式のなかで芸術家の自己形成・自己実現をなして、世界へと回帰する経験をしうるのである。以上のようなメルロ＝ポンティの分析枠組みで、戦後日本の現代美術を牽引した画家の中西夏之の人間形成プロセスを考察した。そして中西において、彼が画家中西夏之として確立していくのには、画家としての知覚と思考の継続、とくに、画家としての自身の知覚・身体性・生き方への自己内省に加えて、絵画表現という表現形式自体を問いかける自己内省が鍵となっていた、ということが明らかになった。

【第10章】

第10章では、第9章で判明した、画家の人間形成の鍵となる、自己内省を伴った画家独自の思考の働かせかたについて、メルロ＝ポンティのさまざまな芸術論から考察した。絵画制作の場面では、明確な言表可能な意図を伴うことのない「没入的対処」と呼ばれるような状態で、絵が描かれることがある。こうした没入的に専門知を発揮して絵画を制作し、人が画家となっていく（人間形成されていく）そのときに、メルロ＝ポンティの絵画論では、以下の三つの描写のなかの「思考」が関わりと説明されていると明らかになった。（i）意図を伴った心的状態としての思考は、何らかの「主体の現在の課題」を遂行するために「特殊な周囲環境」へと身を置くことへと関わる。（ii）注意を伴った心的状態としての思考は、線や色の選択などの「主体の現在の課題」に関わる

行為に継続的に影響を与えて、「主体の運動スキル」の発揮に関わる。(iii) 判断・反省・解釈といった推論的な心的状態としての思考は、「主体がもつ運動スキル」の把握・正当化や、今後の「主体の現在の課題」の設定に継続的に関わる。これらの思考はいずれも、絵画表現固有の規範性に適切に応答して、人が画家へとになっていたり、芸術制度へ積極的に参加していたり、他者へ自己の表現を開いていたりすることを可能にしている、と考えられたのである。

【補論】

ここまで本論文は、人が芸術作品（絵画作品）を作る芸術家（画家）になっていく人間形成過程を探究してきた。だが、第2部の第7章や第8章でも取り上げたように、メルロ＝ポンティは芸術が豊かに展開していくためには、芸術に積極的に関わる者として、芸術家だけでなく鑑賞者も重要視していた。そこで、画家ではない一般の鑑賞者が芸術を介して経験を変容させていく事態の探究が必要と思われた。ただし、この事態をメルロ＝ポンティ自身は詳述してこなかったため、補論では、そうした芸術制度に積極的に関われるようになる過程に相当する実践例として「芸術作品を介した OBL（オブジェクト・ベースト・ラーニング：事物に基づく学習）」という教育プログラムを取り上げ、メルロ＝ポンティがなすであろう解釈枠組みを用いてアプローチした。なおこの箇所のみ、メルロ＝ポンティのテキストの解釈から論を始めたものではないため、「補論」に位置づいた。

補論で取り上げた OBL という実践では、参加者に対してワークシートが配られ、それに基づいて参加者はモノ（芸術作品）に対して、そのモノの背景知識抜きに、いま・ここにあるモノに対して視覚、触覚、嗅覚などをフルに活用し、モノがもつ低次性質に自覚的に向き合うことになる。こうしてモノに向き合う過程で他人と対話をしながら、自分の属する社会階層に意識が向けられたり、社会階層を超えた対話や理解が進むことが、この実践の目的として設定されているようである。私が見るところ、参加者の参加意識や姿勢に多くを依存しているものの、この実践は、芸術領域の規範性に鋭敏な専門家がなす知覚を、多くの人に推論からとらせることを可能にしているように見える。メルロ＝ポンティにおける、画家ではない人にも開かれた「芸術を介した人間形成論」の再構成には、さらなる彼のテキストの内在的解釈が必要となるであろうし、補論で行った経験的研究でもさらなる準備と解釈が必要とされるだろう。だが、人が芸術作品と関わることで経験のしかたを変容し、社会的な分断を乗り越え、さまざまな年齢や立場を超えて他者をつなげていくという、多くの人に開かれた「芸術を介した人間形成論」の概観は、この補論で OBL 実践の解釈を通して描き出したのである。